

た。伴出した土師器や陶器等から、これらの年代は平安時代末～鎌倉時代初期のものと推定される。

## 8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「諸<sup>〔也カ〕</sup>諸仏<sup>〔也カ〕</sup>『五年五月□□』」  
「□□」 190×27×5 065  
・「□見眼」
- (2) ・「□謨<sup>〔也カ〕</sup>両部教主大日如来<sup>〔也カ〕</sup>□王如来<sup>〔也カ〕</sup>无量<sup>〔也カ〕</sup>□」  
・「□」 272×34×6 093  
「□」

(大西素行)

## 正倉院の薬壺と検封木簡

本年の正倉院展に、薬物の治葛を容れた壺が出陳されていた。興味深かったのは、その蓋の墨書である。蓋は一部欠損しているが、「治葛」と墨書があり、これは従来から紹介されている。問題はこれまで言及のない、あと二箇所の墨付きである。展示図録の写真からもわかるように、この内の一つは明らかに文字の一部で、残画から判断すると、「封」の字と思われる。貼紙した上に、紙からはみ出す形で文字が書かれていたらしい。「治葛」の字の右下にある、もう一つの墨書も、やはり同様な「封」のようである。もとは蓋から壺の本体にかけて紙を貼り、その両端に「封」字を書いて封印することが行われていたのであろう。これらは薬の検量や出用が実際の意味をもっていた古代のものではなからうか。

その年代はともかく、これらの封は、近年例を増しつつある、いわゆる検封木簡を考える上に注目される。検封木簡は、上下両端に切込みを入れて紐で縛り、各々に「封」などの字を書く例が多いが、紙では弱い場合や汚損を避ける時に木簡が使われたのであろう。しかも単なる封印なら、封泥のように一箇所でもよいと思われるが封の場所が二箇所に及ぶのは、薬壺の蓋と身のように、二つに分離する構造のものがあ、それを封じたものとみられはしないであらうか。検封木簡について、更に多方面からの検討が望まれる。

(東野)